

目取真俊「水滴」論

―ウチナーグチとヤマトウグチの境界をまたぐ

尾 西 康 充

1

沖縄戦の研究者石原昌家氏は、沖縄国際大学教養部講師に着任した一九七〇年から体験者への聞き取り調査をはじめ、四〇年以上にわたる取材を通じて、のべ二〇〇〇人の証言を約一〇〇〇本のテープに収めてきた。調査のきっかけとなったのは、沖縄県民の体験を調査し、体験者の証言を収録した『沖縄県史』第一〇巻（沖縄戦記録2、一九七四年三月）の執筆者に加わったことであった。県史同巻刊行の時代背景として「わけでも沖縄「返還」が現実の日程にのぼった一九七〇年以降は、沖縄関係出版物のブームに乗って、沖縄戦に関する戦記物が矢つぎばやに発表された」ことがあった。¹ 一一三〇頁におよぶ同書では、「記録の方法は体験者の口述を録音し、執筆者がこれを原稿にまとめた。ただし、あくまで事実の発掘と正確な記録を第一義とし、強いて形式にはこだわらないことにし

た」という。²

証言は透明で、無標の主体によってなされるわけではない。むしろ人種や民族、歴史、政治、階級の特異性を反映し、差異の抗争の場における権力関係を刻印している。暴力の歴史を掘り起こすことは、できごとの当事者性を告発する。「皇軍と呼ばれた日本軍の非人間性」は「沖縄県民にたいする差別意識や行為を助長」したが、「沖縄県民の側にも、この差別政策に全身を委ねていく姿勢が形成されていたこと」も明らかにしている。沖縄戦において「沖縄人はすべて被害者、ヤマトンチューは加害者」という安易な図式をあてはめて論断する風潮もあるが、このような考え方は事実によって訂正されるであろう」とする。³

沖縄戦の証言収集の一環で、伊是名島で「住民スパイ視虐殺事件」を調査した際、石原氏は「単に日本兵だけでなく臣民としての住民が深く関わっており、それを戦後ムラのタブーにしてきたという事

実関係を明らかにした」。住民の証言は「国内が戦場化したとき、地上戦闘に巻き込まれて極限状態に陥った住民同士の最悪の関係図を描いたもの」になってしまったのである。「沖縄戦体験で住民がムラのタブーにしていたほどの深層部分に分け入ってしまった私はその後、刑事二人に身辺警護をしてもらうほどの脅迫を受けた」という。³

戦争の記憶について証言することの困難さは、目取真俊の「水滴」〔文学界〕第五一卷第四号、一九九七年四月）が描き出している。この小説は第二七回九州芸術祭文学賞および第一一七回芥川賞の受賞作品である。前者の賞の選者を務めた立松和平は「水滴」について、「戦争の中の加害者意識を扱った作品は、沖縄の人たちが書いたたぐさんの小説の中でも、希少に属するのではないだろうか。そのことだけでも、凡百の沖縄小説とは一線を画する」という。そして「体験を持たない若い作家だからこそ、戦争を対象化して見ることができのだろう。人の愚かな行為として、戦争を被害者意識から解き放っているのも、作者の手柄である。沖縄の土を踏みしめて書く作家たちの、ひとつの地平を切り開いた作品」と評価したのである。⁵

目取真は、被害者と加害者、^{ウチナンチュ・ヤマトチュ}沖縄人と大和人という「安易な図式」を承認せず、自己決定権が与えられてこなかった「沖縄人」の、地政学上複雑に切り裂かれた自我に注視し、その残余を拾い上げて新たな意味を内側からつむぎだそうとする。証言によって呼び覚ま

れる戦争の記憶——「水滴」が示してみせた新しい地平を検証してみよう。

2

「水滴」は、戦後五〇余年が経過した六月半ばの沖縄が舞台となっている。四〇年近く農業を営んできた主人公徳正は、突然右足が膨れあがつて「中位の——冬瓜^{すばい}ほどにも成長」する。その日から徳正は寝たきりになって、言葉を発せられず合図を送られなくても意識だけは明瞭であった。夜になると日本軍の兵士たちが現れ、親指の先から滴り落ちる水を飲みにくる。彼らは、沖縄戦当時徳正がいた壕^ガで日本軍によって見捨てられた負傷兵たちであった。そのなかには師範学校の同級生で、同じ部隊に配属されていた鉄血勳皇隊員の石嶺が含まれていた。徳正は、これまで意識の下へと抑圧しつづけてきた記憶と向き合わざる得なくなる。他方、従兄弟清裕は、親指の水に育毛強壮剤の効能があることを発見し、それを販売して大儲けする。しかし水の滴りが止まると効能も失われ、清裕は客から袋たたきにされてしまう。

この小説の軸を構成しているのは、徳正と石嶺の関係である。この作品では女性が排除されているのではないか、という重要な指摘もあるが、作品のテーマに沿って両者の関係から検討してみたい。なぜ石嶺は徳正の前に現れたのか。同じ村から二人しか首里の

師範学校に進学できなかったという彼らは沖縄戦当時一七歳であった——徳正の現在の年齢は七〇前ということになる——実際に沖縄師範学校の生徒は防衛召集されて戦闘に動員され、第三軍司令部の直属隊として三八六名中二二四名が戦死した。戦死率は五八％に上った。彼らの任務は伝令と弾薬運搬であったが、爆弾を抱えて米軍戦車に斬り込みを命じられた少年兵もいた。徳正によれば、本島中部での二度目の戦闘で壊滅状態におちいり、「大和人の兵隊数名と行動を共にしながら洞窟から洞窟へと移動を続けた」という。しかし石嶺は艦砲射撃によって腹部を負傷し、徳正は自分の巻脚絆を外して包帯代わりに巻き、碎けた右足首に松の枝の添え木を当てる。負傷した夜「島尻の自然壕」で「別れた時のままの姿」で石嶺は、突然徳正の前に現れたのであった。

右足を引きずり、他の兵士の両肩にすがってしか歩けない石嶺の痛みが徳正の右足に転換したと考えられる。徳正にとって、「とくに気づいていながら認めまいとしてきたことが、はっきりとした形を取って意識に上ってくる」。それは「兵隊たちは、あの夜、壕に遺された者達だった」ことである。

一晚中現れる兵士たちに苛立っていた徳正が「遠くで五時の時報」を聞いたとき、目の前に石嶺ひとりが立っていた。そのとき徳正は「最後に別れた夜のこと」を想起した。石嶺を襲った至近弾は同時に三名の女子学生を即死させた。徳正は石嶺を壕まで引き

ずってきて入り口近くに寝かせたが、夜になって南部への移動命令が伝えられた。女子学徒隊の一員で、同じ村の出身の宮城セツが石嶺を気遣ってくれ、「糸満の外科壕」へ追いかけてくるように告げる。徳正は意識が朦朧とする石嶺に、セツからもらった乾パンを握らせ、水筒の水で口を潤そうとする。だが「あふれた水が頬を伝わるのを目にした瞬間、徳正は我慢できなくなって」それを飲みほしてしまう。たちまち水筒は空になってしまい、「水の粒子がガラスの粉末のように痛みを与えながら全身に広がっていく」。死にゆく石嶺に水を残せなかった、いや残さなかったという罪悪感は、徳正の右足に身体化した。「冬瓜」のように腫れ上がらせた右足から、石嶺に水を滴らせて飲ませてやることによって、かつての利己的行為を償わせようとしたのである。

徳正は空の水筒を腰の辺りにおき、石嶺を残して移動しようとする。

「赦してとらせよ、石嶺……」

徳正は斜面を滑り降り、木々の枝に顔を叩かれながら、森を駆け抜けた。月明かりに白い石灰岩の道が浮かび、倒れた兵が黒い貝のように見えた。鱗が一枚一枚剥がれ落ちていく黒い蛇の尾が道の向こうに見える。その後を追って走っていた徳正は、死んでいると思った兵の伸ばした手に引っ掛かって倒れた。這ってくる兵の手を払って立ち上がろうとした時、右の足首に

痛みが走った。置き去りにされる恐怖が込み上げてくる。徳正は足を引かずって走り続けた。不意に背後で炸裂音が響いた。森の中腹に立て続けに閃光が走る。米軍に発見されることを恐れ、徳正は走りながら、手榴弾で自決した兵士を罵った。

徳正の右足の痛みは、「這ってくる兵士の手を払って立ち上がる」とした時」の記憶もその症因の一つになっている。徳正の利己的行為はさらに、「自決した兵士を罵った」ことに極まる。生死の境をゆく戦場では混乱の限りを尽くすのだが、危険が去って平静さを取り戻すと過去の記憶が禍々しく回帰するのである。意識の下に抑圧したと思っても、かならず記憶は現在の自我に到来し、何らかの症状を引き起こすのである。

徳正の前に現れた兵士たちは、徳正が水を飲ませると約束しながらそれを果たせなかった負傷兵であった。糞尿の汚水すらなめるほど喉を渴かせていたのである。徳正は最初彼らに「殺されるのではないかと恐れた」。この作品を読むうえで、この初発の感情は重要になる。徳正は五〇年越しに彼らによって報復されると畏怖したのである。それは同時に、徳正が彼らの記憶をいかに強く封殺し続けてきたのかの証左になるだろう。だが「その気配がない」ことを知ると「今度は兵隊達の渴きをいやすことが唯一の罪滅ぼしのような気がして、親指を吸われることに喜びさえ覚えた」のであった。し

かし彼らは徳正には「まるで無関心」で「水を飲む前後に敬礼し、頭を下げるもの、それ以外は見向きもしなかった」。そのために「今は疎ましくてならなかった」のである。この感情の速やかな推移は、実は徳正が彼らの記憶と真剣に向き合ってこなかった、いや向き合えないできたことの投影になっている。

徳正にとって、親指を吸われることは性的な昂奮をもたらすのであるが、その快感のために眠りを妨げられる。性的満足、すなわち自己保存の衝動は、かえって自我に苦痛を与える。しかも彼らから一様に無視されるために次第に「頭がおかしくなる」と感じはじめた。足を吸われる徳正は彼らに寄生されるだけでなく、「あの夜」の記憶をよみがえらせ、そのときの光景に向き合わざるを得なくなるのであった。

3

「あの夜」からの四日後、徳正は摩文仁海岸まで追い詰められた。爆風を受けて気を失い波打ち際を漂っている間に、米軍の捕虜となった。しかし「それ以来、収容所でも、村に帰ってからも、誰かにふいに、石嶺を壕に置き去りにしてきたことを咎められはしないか、と恐れる日が続いた」という。この疚しさは、石嶺の母が徳正のもとを訪れたときに、徳正を思わぬ方向に走らせる。

村に帰って一週間は経った時、石嶺の母が訪ねてきた。米軍支給の缶詰や芋を持ってきて、身内のことに無事を喜んでくれる姿を正視できなかった。逃げる途中ではぐれて、その後の行方は知らない、と徳正は嘘をついた。それから数年間、毎日の生活に追われることで、石嶺の記憶を消し去ろうと努めた。

石嶺を残して逃げたことへの自責の念に加えて、彼の母にその経緯を正しく伝えずに「嘘」をついてしまう。このような「嘘」は、不誠実であるという徳正個人の人となりに帰せられるものではない。戦争や災害など生命の危険をとまなつた体験の記憶を、無意識のなかに封じ込めて忘れようとする心的防衛機制の発動として解釈すべきものである。「嘘」をついてから徳正は酒浸りの生活をはじめ。そして、さらにそれを悪化させるできごとが生じた。「祖母の四十九日の席」で宮城セツの死を知ったのであった。彼女は「糸満の外科壕」が爆破された後、徳正がたどり着いた前日に彼女も摩文仁海岸に向かい、徳正が漂っていた波打ち際から「二百メートルも離れていない岩場」で「同僚の女子学生五名と手榴弾で自決を遂げていた」のである。これと同様の、本島最南端に位置する荒崎海岸で女子生徒九名が平良松四郎沖縄県立第一高等女学校教頭とともに手榴弾で自決したいきさつは、元ひめゆり学徒の宮城喜久子が証言している⁶。セツの死を知った徳正は、悲しみと怒りに胸がふさが

れる。だがそれ以上に疚しさからの解放を感じる。

親戚や客が帰った後、徳正は独り浜に降りた。水筒と乾パンを渡し、自分の肩に手を置いたセツの顔が浮かんだ。悲しみとそれ以上の怒りが湧いてきて、セツを死に追いやった連中を打ち殺したかった。同時に、自分の中に、これで石嶺のことを知る者はいない、という安堵の気持ちがあるのを認めずにはおれなかった。声を上げて泣きたかったが、涙は出なかった。酒の量が一気に増えたのはそれからだった。以来、石嶺のこともセツのことも記憶の底に封じ込めて生きてきたはずだった。

しかし、うわべをつくらただけの「安堵の気持ち」は、五〇年余を経て再び自責の念に転じて徳正のもとに回歸する。腫れ上がった醜い右足を抱え、寝た切りになってしまった彼は、「五十年余ごまかしてきた記憶と死ぬまで向かい合い続けねばならないことが恐かった」と感じる。この場面の「冬瓜^{すふい}」は、決して消失することのない罪責感の喩である。

「イシミネよ、赦してとらせ…」

土気色だった石嶺の顔に赤みが差し、唇にも艶が戻っている。怯えや自己嫌悪のなかでも茎は立ち、傷口をくじる舌の感覚に

徳正は小さな声を漏らして精を放った。

唇が離れた。人差し指で軽く口を拭い、立ち上がった石嶺は、十七歳のままだった。正面から見つめる睫の長い目にも、肉の薄い頬にも、朱色の唇にも微笑みが浮かんでいる。ふいに怒りが湧いた。

「この五十年の哀れ、お前が分かるか」

石嶺は笑みを浮かべて徳正を見つめるだけだった。起き上がろうともがく徳正に、石嶺は小さくうなずいた。

「ありがとう。やっと渴きがとれたよ」

きれいな標準語でそう言う、石嶺は笑みを抑えて敬礼し、深々と頭を下げた。壁に消えるまで、石嶺は二度と徳正を見ようとはしなかった。

この場面以降、石嶺を含む兵士たちは二度と現れず、水の効能も消え、徳正の右足も元通りになる。ホモセクシャルな欲望が満たされる性的な光景が描写される一方、徳正の心理的葛藤が表出される。彼は「怯えや自己嫌悪」を抱えながら「精を放つ」。そして過去の行為を謝罪する同時に、これまで五〇余年間の哀れな境遇に対する不満を口にする。宮沢剛氏は、徳正の「償い」が「挫折」した理由として「徳正の「老い」の自覚」をあげる。そして「この時、徳正にとって取り返しのつかないことは、石嶺を置き去りにした

ことではなく、その後の自分の「五〇年」である」と指摘するのである。たとえどれほど償いを施しても、死者はただ沈黙するだけで、それを受け入れて慰撫してはくれない。失ったものは取り返せないという無念さにとらわれたとき、生者は、取り返しのつかないあやまちによって生命を奪われた死者と、はじめて心の邂逅を果たす境地に立っていると気づかされるのである。

「イシミネよ、赦してとらせ…」という声は、石嶺が水を吸いに現れた最初の瞬間の「イシミネ…」と、放置したときの「赦してとらせよ、石嶺…」とに関連づけられている。目取真は小説のなかで沖縄語を使うことを重視する作家である。「赦してとらせ」は沖縄の言葉で、カタカナは漢字表記よりも口語に近いことを感じさせる。「イシミネよ、赦してとらせ…」というセリフは、沖縄人同士の会話が意識され、徳正の真意が表出されていることが伝わる。他方「ふいに怒りが湧いた」徳正による「お前が分かるか」という発語は、ヤマトウグチが使われている。もしウチナーグチなら「やーがわかいみー」となる。怒りに任せて本心をぶちまける際は、生まれ育った土地の言葉を使うのが普通だと思われるのだが、ここで標準語が使われているのはなぜか。松下博文氏によれば、「標準語によるイシミネの返事は、およそ鉄血勤皇隊員という皇軍兵士としての「公」のそれであり、「個」としての彼の思いは徳正を決して赦していないように思う」という。沖縄駐留の日本軍の部隊では、徴用された

住民であっても、ウチナグチを使うことが厳禁されていた。もし使えば米軍のスパイと疑われ、ただちに殺されるという事件も発生していた。徳正とセツの間の応答も「石嶺さんの具合はどうですか」、「私達は糸満の外科壕に向かうから、必ず後を追ってきて」とヤマトグチが使われている。だが徳正が最後にかけた「赦してとらせよ、石嶺…」という言葉は、ウチナグチが使われ、徳正の真意が込められていた。それを反復するかのように、五〇余年を経て徳正は「イシミネよ、赦してとらせ…」と語りかけたのである。

しかしそれに続けて徳正がヤマトグチで「この五十年の哀れ、お前が分かるか」と伝えたので、石嶺は「きれいな標準語」で応えた。この会話は軍隊の紀律に従っていたというだけではなく、なぜ徳正がヤマトグチを使って話しかけたのか、という点を、言語に対する心性の特徴から考察しなければならない。

4

夜中に兵士が現れると、徳正は「なぜ自分がこんな目に合わなければならぬのか」と「日に何十回」も嘆くようになった。だがその嘆きは、戦争に巻き込まれて理不尽な死に方をした人びとすべてに共通する感情である。徳正がそれを共有するようになってはじめて真に赦しを乞う姿勢が彼のなかに生まれる。ただ彼は「その理由を考えようとはしなかった」。なぜなら「いったん考え始めれば、

この五十年余の間に胸の奥に溜まったものが、とめどもなく溢れ出すような気がして恐ろしかった」からである。

徳正が「共通語」^{ヤマトグチ}を話すのは、小学生に向かって教室で戦争体験を話すときである。「この十年来」、六月二三日の沖繩戦戦没者慰霊の日の前になると毎日講演会に追われるようになる。「そもそもは、同じ字に住む若い教師が、クラスの子供達の前で話してくれないか、と頼みにきたのがきっかけだった」という。

ところで、家永教科書裁判第三次訴訟（一九八四年一月一九日東京地裁提訴）では、沖繩戦の「集団自決」をめぐる記述に関して、家永三郎原告側が沖繩への出張尋問を求めた。八八年二月九、一〇日、大田昌秀、安仁屋政昭、金城重明、山川宗秀の四氏が那覇地方裁判所の証言台に立った。県民ぐるみで裁判を支援するために沖繩県教職員組合は、同月五日に「教科書裁判沖繩出張法廷勝利県民決起大会」を那覇市立与儀小学校で開催した。「集団自決」が存在したか否かを論じるだけではなく、それをどのように呼称するのか——「集団死」、「強制集団死」、「強制的集団自殺」他——裁判の背景には、戦争の記憶をだれがどの視点から語るのか、というナラティブの問題が存していた。死者がニライカナイへ成仏するという三三回忌を節目に沖繩戦を証言する人が増えた。さらにこの裁判をきっかけに、それまで沈黙していた体験者が正しい、沖繩戦の記憶を語ろうとしはじめたといわれる。徳正もまた、「若い男の教師」と「女

子生徒二人」の熱意に負けて教室で語るようになる。⁽¹⁰⁾

六年生の教室で、終始うつむいたまま、徳正は用意してきた原稿を読み上げた。馴れない共通語はつかえ通しで、三十分の予定が十五分ちょっとで終わってしまった。恐る恐る顔をあげると、一瞬の間を置いて拍手が鳴り響いた。泣き顔のまま一所懸命手を叩いている子供達の姿を目にして、徳正は面食らった。何がそんなに子供達を感動させたのか分からなかった。(中略)初めは無我夢中で話をしていた徳正も、しだに相手がどういうところを聞きたがっているのか分かるようになり、あまりうまく話しすぎないようにするのが大切なもの気づいた。調子に乗って話している一方で、子供達の真剣な眼差しに後ろめたさを覚えたり、怖気づいたりすることも多かった。

徳正が教室で使う言葉はなぜ「馴れない共通語」なのか。嘘をついていたので話し方がごちなかっただけなのかもしれない。そして彼の話はなぜ「そんなに子供達を感動させたのか」。これらを考えるには、戦後の沖縄教育界を振り返る必要がある。教科書裁判支援で一角を占めた沖教組(復帰前は沖縄県教職員会)は、復帰運動でも重要な役割を果たしていた。¹¹⁾「祖国復帰」を達成するためには、沖縄県民が日本国民としての強い自覚を持つことが急務であると

し、方言撲滅・標準語励行の運動——ヤマトウグチが標準語あるは共通語であるとする規範化——を展開して、方言札教育を戦前戦中から引き継いだのである。徳正や石嶺がヤマトウグチを使用したのは、かれらがかつてそれらの運動の担い手であった師範生であったことにもよる。しかしそれだけでは戦前回帰であったとはいえない。むしろ、教室での徳正の語りは「日本化」を積極的に推進した戦後沖縄の同化主義的な教育政策——標準語化の度合いが学力向上と文化的生活の指標となる——の典型的な現象であった。通時的にそこに共通していたのはヤマトウグチの身体化と植民地主義のまなざしの内面化なのである。

仲里効氏によれば、「戦後沖縄における言語教育は、一九六二年の教研大会から「国民教育」分科が設置されることによって、国民統合の装置として強力に機能していった」。そして「国語化・標準語化の実践は、教師たちの情熱や使命感に支えられているだけに、皮肉にもコロナアルな言語警察の様相を呈し、琉球諸島の言叢の風景を踏み均していった」。これらの取り組みの結果として「アメリカの植民地から脱し、「日本」を呼び込む文体がより深く植民地主義を内在化する」というアポリアを抱え込んだしまったという¹²⁾。正しい日本人になるために教室ではヤマトウグチを使わなければならなかったし、祖国日本への忠誠を示して戦い死ぬことが正しい歴史になるのであった。たとえそれが嘘であってもその正しさに児童や

生徒は感動させられたのである。しかし戦場における勇敢さや犠牲の傷ましきといった《英雄譚の話型》に迎合することの違和感は、実は徳正自身がよく分かっていた。徳正のヤマトウグチは「馴れない」ものになったというのは、この作品を読み解くカギになるのである。

徳正の妻ウシは、徳正に向かって「嘘物言いして戦場の哀れ事語てい銭儲けしよって、今に罰被るよ」と難詰する。彼女には「老人会の戦跡地巡りの観光バス」に乗ったエピソードが添えられている。沖縄では復帰後、本土から訪れる観光客のために南部戦跡をめぐる定期観光バスを走らせるようになった。だが大城将保氏によれば、そこでは「旧日本軍や、これに「進んで協力した」学徒隊などの戦場美談のかげで、一般住民の戦場行動と犠牲の実態というものは一切語られない」。バスの行程は約四時間になっているが、実際に戦跡を案内するのはわずか一時間ほどで、摩文仁を去るときにガイドは「英霊の御霊が安らかに眠られんことを祈りながら…」と断ってから軍歌「海ゆかば」を乗客と一緒に合唱する。「戦場の死を美化したがる日本人独特の「死の美学」がたっぷりと盛り込まれているのだが、こういう感覚はもともと沖縄にはないものである」という。徳正が教室で語った体験談は、このような「戦場の靖国化」の風潮につながるものであったのだろうか――。

目取真は「冬瓜」の寓話を着想したきっかけを明かしている。沖縄女性史家の宮城晴美との対談のなかで、宮城は、座間味島には足が腫れて水滴が出た男性が実在していたというエピソードを話す。集団自決で家族全員が殺鼠剤を飲むが死には至らなかった。その男性は苦しみもがく妻子を棍棒で打ったり、壁にぶついたりして殺し、自分だけが生き残る。戦後ずっと足が腫れ歩けない状態であったが、あるとき足の皮膚が破れて健康を回復したという。目取真はこれを知り、つぎのように話している。

種明かししますが、まさにその話に基づいて、私は書いているんですよ。学生時代の二十何年前にある人から聞いたそのエピソードをずっと覚えていて、それが「水滴」を書くときのひとつの基になったんです。他にも港湾労働をしながら年配の方から聞いた話や、いくつかのエピソードがイメージの基になっています。何もないところから生まれたのではなく、子どもの頃から聞いてきた沖縄戦の話が小説に形を変えているんです。¹³

目取真は創作に際して家族から聞いた沖縄戦の記憶をモチーフにしている。彼の父親は一四歳で鉄血勤皇隊に動員された。目取真に

よれば、父親は「米軍上陸後も、日本兵と銃をもって山にこもり、食料を必死で運んだ。だが、米軍につけられるのを恐れた日本兵が、自分を殺す相談をしているのを聞いた」。そのとき、それまで「信じていたものが一夜にしてひっくり返った挫折感で、父親の人生は変わった」という¹⁴⁾。

沖縄戦では一般住民が米軍のスパイとみなされ、日本兵に殺されるという事件が発生している。一般住民のみならず、皇民化を推進するために標準語教育を徹底し、生活改善運動を展開した照屋忠栄本部国民学校長——前職は今帰仁村天底尋常高等小学校校長を一五年間務めた——もまた、日本兵に虐殺されているのである。指導者としての照屋は、郷土を振興させるために日本を志向するが、日本への志向は郷土の生活改善——家庭・社会生活での節約と合理化、風俗や道徳の健全化を唱える社会教育——の場で実践されるべきものであると考えていた。富山一郎氏は、照屋のように「一貫して『日本人』であろうとした人間が他者（＝敵）として殺された」という事実に着目する。「沖縄戦という戦場には、『日本人』としての死への動員と『スパイ』（＝敵）としての虐殺という二つの決定的に分割された死」が存在したとされるが、「一方が『殉国美談』として、他方が『抑圧者＝日本人』による『被抑圧者＝沖縄人』の虐殺として別々に語るべきではないだろう」とする。そこで問題となっているのは「真の国民になりきれない人間が、あるいは逆に敵になりき

れない人間が、戦場における二つの死に切り裂かれたときに残る、回収されない領域の行方である」という¹⁵⁾。

これを考慮に入れば、ヤマトウグチを使うから、徳正が沖縄戦の「靖国化」に加担していたとは単純にいえなくなる。教室の児童や生徒たちに記憶を吸い出され、亡霊の兵士たちに水滴を吸われる彼は、過去の体験に寄生され、生を侵蝕され続けてきた被害者でもあった。石嶺は徳正が自分の罪を認めたから赦したのではなく、戦後五〇余年間苦しんできた徳正もまた被害者の一人であることを、まず徳正自身が受け入れて、そしてそれを声に出せたことによってコミュニケーションの再開につながったのである。

ウチナーグチとヤマトウグチの境界をまたぐ。ヤマトウグチを使って赦しを乞うた徳正に向かって、石嶺が「正しい標準語」で応じたのは、沖縄人が標準語を意識的に使用する場合の心性を示している。徳正も石嶺も、地域社会では指導者層を形成する師範学校に通っていた。彼らは標準語を使えるだけでなく、標準語教育を推進する教師となることを期待された生徒であった。中学生や師範生からなる鉄血勤皇隊員は他の若者よりもより強く臣民化されていた。師範生の矜持から「正しい標準語」を使い、フレンドシップを示したといえる。石嶺は五〇余年ぶりに徳正の前で口を開いた。彼らにとって規範性の強いヤマトウグチを使うことによって、声に合理性が与えられ、客観化が図られる。徳正は憤懣をぶちまけるのではな

く、感情を抑制しながら五〇余年におよぶ「哀れ」を吐露したのである。ウチナーグチを使えば怒りに任せて石嶺を責め立てることに
なってしまう。そもそも非は自分にあるのだからそれはできない。
どれほど辛い五〇余年であったとしても、石嶺に共感を求めること
などナンセンスである。そこで、複雑かつ屈折した歲月の長さをヤ
マトゥグチで伝えようとしたのではないか。そのような徳正の気持
ちに応えて、石嶺は「小さくうなずいた」。しかし徳正の、失われ
た五〇余年への痛惜は、決して合理的にも客観的にも語れるはずの
ないものである。ヤマトゥグチでは伝わらない、しかしウチナーグ
チも使えない、どちらの言葉からもはみ出した残余に、苦渋に満ち
た戦争体験者の語り得ぬ思いが潜んでいるのである——その残余を
掬いあげる創作上の手法として、本作品ではリアリズムを離れた寓
話の形式がとられているのだと考えられる。

その一方、徳正は教室では「馴れない共通語」しか使えなかった。
それは嘘の証言を披露するために緊張していたことが原因では
ない。彼の戦後の苦難に満ちた境涯——早朝と夜は畑作業で昼は米
軍港の荷揚げ作業、米軍基地での日雇い労務、塗装業、素潜り漁な
ど——将来は教師になるはずの人生から大きく逸れた人生を送って
きた。四〇年近く農業をしていたウシはウチナーグチだけで話し、
普段ウチナーグチの清裕は、効能の消えた水滴への苦情に対処する
ときだけヤマトゥグチを使っている。

徳正による「共通語」の馴れなさは、「正しい標準語」が使えた
一八歳当時との懸隔、そして徳正の五〇余年間の苦難を示している。
ヤマトンチューによる被害者でありながら同時に、同じ沖縄人に対
する加害者ともなり得る、厳しい地上戦を体験した沖縄人の回収さ
れることのない残余として、快復することのない戦争体験者の精神
的な後遺症が存在する。とりあえず「冬瓜」の件が落着いたので、
壕に花を捧げ、遺骨を探そうと決意するものの、徳正は「自分はま
たぐずぐずと時間を引き伸ばし、記憶を曖昧にして、石嶺のことを
忘れようとするのではないかと不安」になる。禁酒の誓いも破って
再び飲酒をはじめていた。徳正が生き続けるかぎり、戦争体験の記
憶は封じ込められず、症候となって回帰するのである。

注 本文は『水滴』（一九九七年九月、文藝春秋）に拠った。

- (1) 『沖縄県史』第一〇巻（沖縄戦記録2、一九七四年三月、一〇九五頁）
- (2) 「凡例」⑤（同右書、一一頁）
- (3) 安仁屋政昭「総説」（同右書、一一〇六―一一〇七頁）
- (4) 石原昌家「私の戦争体験調査と大学生との係わり」自家広告的「石原ゼミナール」の活動を通して」（『沖縄国際大学社会文化研究』第七巻第一号、二〇〇四年三月、八〇頁）
- (5) 立松和平「選評 文学の水脈」（『文学界』第五一巻第四号、一九九七年四月、一六三頁）
- (6) 宮城喜久子「学徒隊解散・自決を覚悟」（『NHKホームページ戦争証言アーカイブ』他）

- (7) 田口律男氏は「このテキストにおいて、戦死した兵士の「癒し」があまりにも安直に語られてはいまいか」と指摘する。そして「極論すれば、ここでの「癒し」は、ホモソーシャルな軍隊内部の男性原理的なエロスの癒合による「癒し」なのである。目取真が「沖縄を癒しの場として捉えるような発想」を峻拒するとすれば、こうしたホモソーシャルなエロスの癒合による「癒し」のイメージに対しても、もっと抑制的であるべきではなかったのか」と批判する（『都市テキスト論としての「沖縄」』（二）目取真俊「水滴」を視座として」、「文教国文学」第三八・三九号、一九九八年三月、一四八―一四九頁）。村上陽子氏も、この作品が男性的な記憶の循環の物語であり、ウシや宮城セツといった女性が水の循環から排除されていると指摘している（『循環する水―目取真俊「水滴」』、『出来事の残響 原爆文学と沖縄文学』、二〇一五年七月、インパクト出版会、二六五頁）。田口、村上両氏が指摘した点は、「水滴」が抱える本質的な問題―安易な赦しによって本作品が戦友の友情譚に堕していないか、女性性は共同体の脅威を象徴するものなので排除されているのではないか―である。だが本作品は完結していない。語り得ない残余を指し示すだけである。その完結できていないところにこそ、本作品の評価すべきポイントがあると考ええる。
- (8) 宮沢剛「目取真俊「水滴」論―幽霊と出会うために」（『文学の闇／近代の「沈黙」』、「文学年報」創刊号、二〇〇三年一月、三七四頁）
- (9) 松下博文「沖縄戦と「きれいな標準語」―目取真俊「水滴」への視角」（『語文研究』第一〇〇・一〇一号、二〇〇六年六月、一四三頁）
- (10) 天満尚仁氏は「徳正にとって講演活動は右傾を忘れるという目的のための手段には成り得ない。それは右傾と向き合うという目的であると同時に手段でもある。従って、徳正の捏造的物語行為という不誠実さは一方的に糾弾されるべきではない。むしろ、そのような騙りの背理性を徳正

- に強いてしまうことこそが、語り得ない単独的な「沖縄戦」を指し示しているからだ」と指摘している（『単独性としての「沖縄戦」―目取真俊「水滴」論』、「立教大学日本文学」第一〇三号、二〇〇九年二月、一四一頁）。
- (11) 仲里効「翻訳的身体と境界の憂鬱」（『沖縄・問いを立てる² 方言札―ことばと身体」、評論社、二〇〇八年八月、一三三・一四〇・一四二頁）
- (12) 大城将保「沖縄戦の真実をめぐる―皇軍史観と民衆史観の確執」（『争点・沖縄戦の記憶』、二〇〇二年三月、社会評論社、三四―三五頁）
- (13) 目取真俊・宮城晴美「終わらない「集団自決」と、「文学」の課題」（『すばる』第二九巻第二号、二〇〇七年二月、一六四頁）
- (14) 「記憶と想像の間 6 「戦後」ゼロ年 本土の勝手さ、沖縄の怒り」（『朝日新聞』二〇〇五年七月二七日）
- (15) 富山一郎『増補戦場の記憶』（二〇〇六年七月、日本経済評論社、一七八―一八〇頁）。また大原祐治氏は「このとき、徳正／石嶺という対偶の目の前には、〈見捨てた者／見捨てられた者〉、〈生き延びた者／死んだ者〉、〈償う者／赦す者〉、といった二項対立の図式では処理しきれない領域が広がっている」と指摘する。そして「この想起のプロセスを通して、その向こう側に幽霊にもならない／なれない、〈語り得ぬ何か〉としてあるセツのような存在と、徳正が向き合う瞬間が提示されているところにこそ、この小説の核心は存する」と論じている（『二者択一』の論理に抗する―目取真俊「水滴」論』、『学習院大学国語国文学会誌』第五一号、二〇〇八年三月、六三、六六頁）。

―おにし・やすみつ、三重大学理事・副学長―